

# イスパノ・モレスク様式 クエンカ・タイル *the Cuenca Technique*

author 後藤泰男 | Yasuo Goto

ごとう・やすお——INAX文化推進部ミュージアム活動推進室室長/1959年生まれ。1985年、豊橋技術科学大学物質工学専攻修了。同年、INAX入社。窯業技術研究室、分析センター、常滑東工場でタイル技術開発にかかわる仕事に携わる。2006年、ミュージアム活動推進室ものづくり工房を立ち上げ、2008年より現職。

## [クローズアップ・タイル]

### イスパノ・モレスク様式 組紐文クエンカ・タイル——1

アルハンブラ宮殿に使用されていたと伝えられるクエンカ・タイル。組紐文の装飾で囲まれた中央の紋章のようなモチーフには、「神様は主(アラー)しかいない」とコーランの本質が書かれている。“クエンカ手法”とは、型などで文様の輪郭を残して他の部分を押し込み、凹部に色釉薬を詰めて焼成する手法で、文様の輪郭が浮き彫りになっているため、色が混じり合うことはない[14世紀末/188×188mm/スペイン]

1



## [タイルのデザイン]

### タイルの文様——2-5

宗教上の理由から、初期のイスパノ・モレスク様式では生物の図像表現が禁じられていたため、タイルのモチーフも組紐文、星形文など、イスラム文化の中で発達した幾何学文様が基本であった  
2—幾何学文クエンカ・タイル[15世紀/140×140mm]|3—同[15世紀末/92×91×18mm]|4—同[15世紀/289×289mm]|5—紋章文クエンカ・タイル[17-18世紀/217×208mm]|いずれも制作地はスペイン

## [タイルのある風景]

### アルハンブラ宮殿に見るクエンカ・タイル——6,7

アルハンブラ宮殿の中核をなす王宮の壁や床、そして中庭に面する壁面に多くのタイル装飾が施されている。何人も王が増改築を繰り返してきた中で、技法的に新しいクエンカ・タイルが大量に使用されているのは、後期の増改築によるものであることを裏付けている  
6—アルハンブラ宮殿王宮:大使の間の床|7—同:アベンセラヘスの間の腰壁

- 7世紀、ベルシャ帝国に生まれたイスラム教は、キリスト教支配の東ローマ帝国があまりにも強大だったため、北アフリカのマグリブを経て、8世紀から10世紀にかけてイベリア半島スペインに上陸する。その後、15世紀末まで続いたイスラム教徒の支配は、キリスト教徒と激しく争いながらイベリア半島の文化・歴史をつくり上げていった。イスラム教の支配下において、スペインで独自に生み出された芸術様式をイスパノ・モレスク様式と呼ぶ。
- イベリア半島最後のイスラム王朝・ナスル朝の首都であったグラナダのアルハンブラ宮殿は、1238年に建設が始まり、1492年のキリスト教徒による国土回復運動(レコンキスタ)による宮殿の開城まで、実に21人の王が増改築を繰り返しながらつくり上げた。特に王たちが正妻や愛妾と生活を共にした王宮は、壁や床、天井までがレパノン杉、漆喰、大理石、アラバスター、そしてタイルによって華やかに装飾されている。
- アルハンブラ宮殿の歴史において21人の王が増改築を繰り返してきた事実こそが、タイル装飾発展の歴史でもある。宮殿建設の初期は、カットワーク・モザイクによる幾何学文様で漆喰やアラバスターと共に壁面を装飾している。カットワーク・モザイクによる壁面装飾の手法は、北アフリカから渡ってきたムア人たちが伝えたもので、時間と手間がかかった。この時間と手間を省くことから生まれた手法がクエンカ手法で、カットワーク・モザイクで描かれたものと同じ幾何学文様のタイルもつくられている。その後、イスラム教が欧州から撤退した後もタイル文化は欧州全体に拡大していくことになるが、時代を経た19世紀のイギリスのヴィクトリアン・タイルの加飾手法のひとつであるチューブライニングは、このクエンカ手法を応用した技術である。
- アルハンブラ宮殿の王宮を飾るタイル装飾技法の発展を見ながら、当時の王たちが暮らした情景や歴史を想像し、さらにその後、発展してきたタイル装飾の歴史の中で果たしたこの時代の役割を考えてみた。

— ここで紹介しているタイルは「世界のタイル博物館」で常設展示しています。



2

3

4

5

6,7